

臓器移植から命を考える

村上市立平林中学校 3年 田 島 隆 斗

「グリーンリボン」ときいて何を表すか分かる人は少ないと思います。グリーンリボンは移植医療のシンボルです。臓器移植は、臓器が機能しなくなってしまったときに亡くなった人の健康な臓器と交換する治療法です。臓器を提供する人をドナー、提供を受ける人をレシピエントといいます。

日本で唯一、臓器移植の幹旋を行っている機関「公益社団法人日本臓器移植ネットワーク」。現在この機関に心臓、肺、肝臓、腎臓、すい臓、小腸の移植を希望して登録している人は1万人以上います。しかし、昨年の提供件数は84件、移植件数は281件とまだまだ追いつかないのが現状です。

ところで、臓器を提供する前提となる「死」には二種類あるのを知っていますか。

一つ目は心臓が止まって血が流れなくなる心臓死です。この場合に提供できる臓器は、眼球、腎臓、すい臓の三つです。

二つ目は、脳のすべての機能が回復しなくなる脳死です。事故や脳の病気で起こることが多く、心臓は動いていても意識はなく、呼吸も止まってしまいます。しかし、人工呼吸器を使うと酸素を血液に送ることができるので体は温かく、爪や髪も伸びます。見た目は眠っているように見えても元の元気な状態に戻ることはなく、やがて心臓も止まってしまうのが脳死です。この場合に提供できる臓器は眼球、心臓、肺、肝臓、腎臓、すい臓、小腸の七つです。

あなたは、自分や家族の一生が終わったときに、まだ使える臓器があったら提供するかどうかなどと考えたことがありますか。なかったとしても、今、このように問われてどう考えますか。「心臓死のときは提供しても良いが、脳死のときは嫌だ。」とか、「どちらの場合でも眼球を提供するには抵抗がある。」あるいは、「自分は良いが、家族が脳死になってしまったら断る。」などさまざまな考えがあり、どの気持ちもその人の視点から見れば納得のいくものです。

家族の場合は分かりませんが、今の時点では僕は自分が死んだら、脳死、心臓死のどちらの場合でも、まだ使える臓器があれば提供したいと考えています。だからといって「それが正論だ」と僕の意見を押しつけるつもりはありません。僕には僕の命に対する考え方があります。

僕がまだ小学生だった頃は、僕自身、臓器移植に抵抗がありました。死後とはいえ、自分の臓器が取り出されるというのは考えられませんでした。ましてや脳死の場合など、蘇生の可能性があるのに間違っただけで脳死と判断されたらと考えると、臓器を提供したいと思えるはずもありませんでした。

しかし、中学生になって将来の目標がある程度決まってくると、命に対しての考え方が変わりました。それまではただ長生きすればするほど良いことだと考えていました。しかし僕は人生はながさだけではなく中身が大切だと考えるようになったのです。その中身で何を大切にするか。僕は小学生のときに担任の先生が言っていた「自己犠牲」という言葉を思い出しました。自己犠牲も度が過ぎるのは良くありませんが、僕は将来、人の命を守

るために自分を犠牲にして働ける医療従事者になりたいです。人の死に際して、悲しい思いをする人がたくさんいることを考えると、人の命ほど大切なものはないように思えます。だからこそ、自分を犠牲にしてでも守る価値があると思うのです。

そう考えているうちに、自分が死んでもまだ使える臓器があれば人に提供したいと思うようになりました。また、もしも万が一間違っただけで脳死と判断されてしまっても、そのことをおそれるのではなく、そのときに「自分は精一杯生きたから悔いはない」と思えるように生きていきたいです。

臓器提供をしたいかしたくないか。この問題に正解、不正解はありません。ただ一点、臓器提供によって救われる命があるのは事実です。もっと多くの人々が、この問題と真剣に向き合って考えていくことが、命の尊厳を考えるうえで必要なのだと思います。